

東北秘湯の旅 2022



2022年7月

旅のチカラ研究所 植木圭二

東北地方の7つの秘湯を巡るツアーに妻と参加してきた。秘湯を満喫して、なかなか感動的な旅になった。秘湯に特化したこのようなツアーは今後の旅の一つの方向性を示しているように感じ、ここで紹介したい。

■秘湯巡りへ

今年の梅雨明け宣言は6月だったが、7月になっても戻り梅雨のような日々が続く中、私たち夫婦は秘湯巡りのツアーに参加するために東京駅にやってきた。集合場所には各社各方面の新幹線やバスに乗るツアー客が集まっており、コロナ禍と言いながらも世の中は旅行再開の動きが活発化していると感じる。

今回のツアーの正式名称は「あこがれの夏油温泉（1泊目）に泊まる7つのみちのく秘湯めぐり4日間」というもので秘湯に特化したツアーになっている。このツアーに参加した理由は、今年の冬に北海道の道北地域の温泉を巡るだけというツアーに参加して味をしめたからだ。

ツアー客は全部で32人、年配のカップルが多く、普通の国内旅行は行き飽きたという面々がそろっているように感じる。そんなツアー客たちは東北新幹線の北上駅で降りて、マイクロバス2台に分乗して本日泊まる宿に向かう。宿までの道が狭くて大型バスは入れないため宿の送迎バスに乗ってもらったと、添乗員は少し言い訳がましく言っている。

バスに乗ると衝撃的なラジオのニュースが流れている。それは安倍元首相が銃撃されたというもので、乗客たちは騒然として皆スマホを覗き込み情報収集している。何しろ本日の宿は携帯電話も通じず、テレビも映らない秘境の宿だと添乗員が言っているからだ。

■夏油温泉

そんな乗客たちを乗せ、バスは約1時間で夏油（げとう）温泉「元湯夏油」に到着する。宿は標高580mにあるため爽やかな高原の空気が私たちを迎えてくれる。それにしてもまだ午後1時だというのに本日の秘湯巡りはこの1軒だけになっている。なんと優雅な旅なのだろうと感心しつつ、それほどまでに夏油温泉とは奥が深く時間をかけるべき宿なのだと期待してしまう。

玄関を入ってすぐ、宿の館主からこの宿の温泉について簡単な説明を受ける。

男女別の内湯が各2つ、露天風呂は全部で5つあって、そのうち1つは女性専用で、あとは混浴だが女性専用時間を設けている。露天風呂は夜9時まで入浴でき、その後は湯を全て流して掃除して、明け方には満杯になる。そのくらいの湧出量なので水着やバスタオルを巻いての入浴は湯の汚れが顕著になる。そうなったら保健所から塩素を入れてくれと指導を受けおり、塩素を入れたくないので水着やバスタオルを禁止して毎日湯を入れ替えていると言っている。

この説明に女性陣含め全員がうなずいている。昨今は混浴に水着やバスタオルで入浴する女性が多いが、単に入浴マナーの問題ではないという説明には私も納得する。

私たちが泊まる宿の奥には昔いくつかの旅館があったようで、小さな温泉街のようにしている。そこを抜けて行くと露天風呂が溪流沿いにいくつもある。



【元湯夏油の正面】



【露天風呂への道 かつての温泉街？】

まずは温めの湯に入る。先客がいるので話を聞くと、県内の人で夏油温泉の魅力にひかれて月に一度は来ているという。湯船のすぐ隣に溪流が流れており、それが湯に浸かると目線の高さになる。対岸の木々の緑も近く、川のせせらぎを聞きながらの入浴は実に趣がある。

肝心の泉質は、成分表を見る限りはあまり特徴がない。それでもかけ流しで、浴槽の底からブクブクと源泉が湧いている。つまり源泉が大気に触れることなく浴槽に溜まるので温泉の鮮度が抜群に良く、若返りやアンチエイジング効果が期待できる。



【温めの湯】

次は最も熱い湯に入る。館主の説明ではとにかく熱いが、それゆえに効能は抜群だと言っていた。杖を突いて湯治に来た人が、しばらく滞在してこの湯に浸かっていたら、帰る時には杖が不要になったという逸話を紹介してくれた。ただこの類の話は至る所で聞くのであまりあてにはならない。むしろこの露天風呂に行く階段が結構長くて急なので、この往復によって足腰が鍛えられるからだろうと添乗員は言っていた。

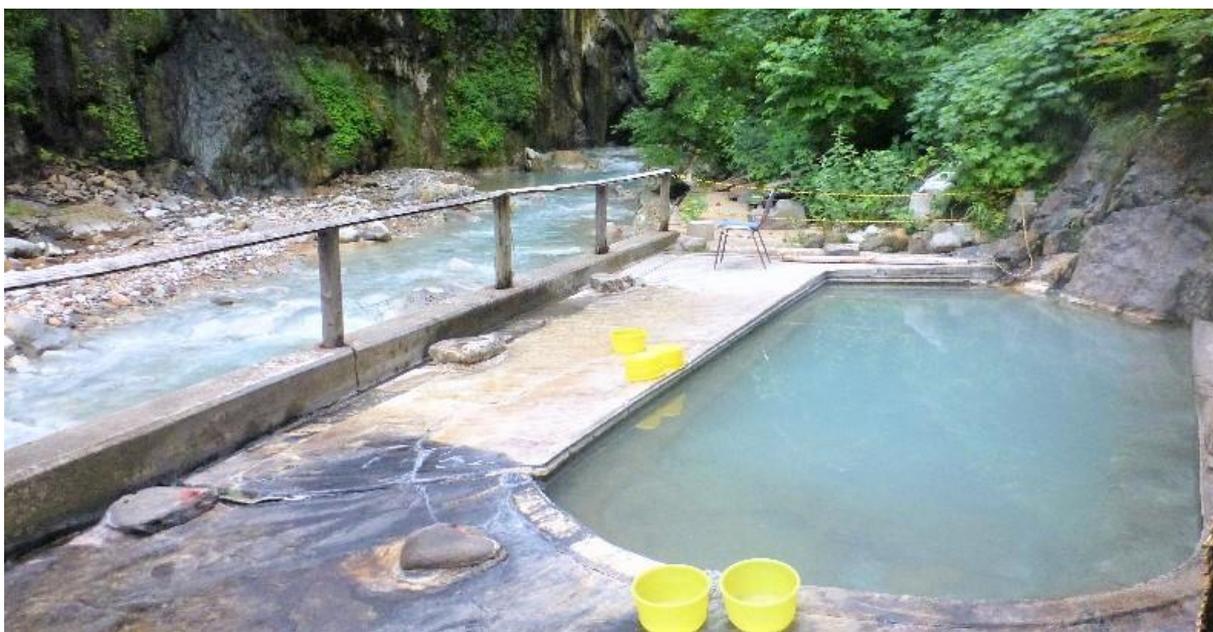
そんなことを考えながら湯に浸かる。いや浸かろうとするが、とにかく熱くて足の先を入れただけでギブアップだ。先客の話では本日の泉温は47℃位だと言っており、先客はその熱い湯にすりと入って見せた。私はせっかくここまで来て、この湯に入らないのでは禍根を残すと思い、一大奮起をして10秒間を目指して挑戦する。館主は体が熱さを感じる前に入るのがコツだと話していたのを思い出し、すりと入った。確かに体は熱さを感じていないが、足はすぐにじんじんと熱さを感じている。それでも10秒間我慢して何とか目標をクリアする。

この人体実験によって、人間は足が熱さを敏感に感じるようになっていたことを発見する。おそらく人類が2足歩行を始めた頃は裸足なので、足は熱さを最初に感じ取り、危険を回避するためなのだろう。

湯から上がった後に、じわじわと体が心地よい刺激のようなものを感じている。地球内部のマグマのエネルギーを体内にもらったような気もする。その心地よさが忘れられずに、今度は20秒間浸かる。するとまた湯から上がったからの心地よさが、先ほどよりも増している。そしてまた30秒間浸かる。都合1分間で私の体は生まれ変わったような気分になる。

「この温泉は効くー!」、私の心の叫びが聞こえる。

これならば杖が不要になった話もあながち嘘ではないかもしれない。熱い湯を感じる足が一番影響を受けるからからだ。



【熱い湯】

温くもなく熱くもない適温の露天風呂に入る。41℃くらいだろうか、実にいい温度に仕上がっている。湯船の深さも広さもちょうど良く、しばしの間至福の時を過ごす。溪流を挟んで対岸にも露天風呂があり、普通ならば橋が架かって渡れるようだが、今は橋が壊れていて渡ることができないので対岸の露天風呂は閉鎖中だ。

私が1人で湯に浸かっていると、1人の若者が入ってくる。話を聞くと登山のインストラクターで、来月には十数人を引き連れて登山に来るのでその下見に来たと言う。本番では山小屋に2泊して、最終日は夏油温泉に泊まる予定で、登山口まではチャーターバスを利用するが、帰りはこの宿の送迎バスを利用したいと言っている。私は思わず「えっ、チャーターバス、凄いね」と言うと、彼は「最近、結構豪華なですよ」と苦笑いをしている。

もともと秘湯の宿は登山客が利用することが多く、私たちのような客はマイナーであることを改めて思い知る。



【右が適温の湯 左が対岸の湯】



【適温の湯の入口 男女別に入口がある】

女性専用露天風呂は私が入ることができないが、妻の話では木材に囲われていて他の露天風呂のような解放感がないという。

2つの内湯はどちらも風情ある造りで、一般的な温泉宿ならばこの1つだけでもお客は満足するだろう。

とにかく風呂のバリエーションは凄い。これならば午後1時にチェックインするのも納得する。

私たちが泊まる部屋は4畳半でトイレと洗面所は共同になっている。部屋にある備品といえば小さな座卓と時代遅れの扇風機が1台、至ってシンプルだ。いかにも湯治に来たという雰囲気を感じられる。

夜は網戸から涼しい風が入ってくる。そして風と一緒に虫の声やカエルの鳴き声も聞こえてくるから実に風情ある気持ち良い夜を過ごす。それにしても煎餅布団の感触が久しぶりで、何とも言えない“秘湯感”が伝わってくる。

■松川温泉

翌日、マイクロバスで下界まで送ってもらい、旅行会社がチャーターした大型バスに乗り換える。バス1台なので何か一体感が出てきたように感じるのは私だけではないだろう。

東北自動車道を走り東北地方の北部の代表的な岩手山が見えてくる。標高2038mあるが、その西側は比較的なだらかな山麓で、標高830mに位置する松川温泉の「松川荘」を訪れる。

付近一帯はかなり強烈な硫黄臭がしている。その理由は宿のすぐ隣の地下から高温の蒸気がたくさん出ているからで、その蒸気には温泉成分も含まれているからだろう。

その高温の蒸気を集めて、太いパイプで近くの地熱発電所に送っている。そのため松川温泉は地熱発電所のある温泉ということでも有名になっている。



【松川温泉から地熱発電所への蒸気パイプ】

この宿には男女別の内湯の他に混浴露天風呂と女性専用露天風呂がある。入浴前に添乗員が「宿からのお願いで、内湯から露天風呂に行く際にロビーの前を通りますが、稀に着替えるのが面倒なのでタオル1枚だけで通る人がおり、それだけはやめて下さい」と釘を刺される。

まず、私は内湯に入る。私の好きな硫黄泉で、実に心地よい。卵の腐ったようなという表現を使う人もいるが、むしろ私はその臭いにひかれて温泉好きになったと言っても過言ではない。

内湯から露天風呂に行くために、宿のお願いを思い出して、一旦着替えて内湯を出て、露天風呂に行く。これは確かに面倒だ。露天風呂の入口には熱湯で温泉玉子を作る釜がある。その釜の周辺から勢いよく高温の蒸気が湧き出ており、露天風呂の半分くらいはその湯気に包まれている。



【混浴露天風呂 宿のHPより】

露天風呂を出てロビーで涼んでいると、同じツアーの女性客がバスタオル1枚で内湯から露天風呂に行こうとしている。このおばさん、何を考えているか。あれだけ釘を刺されていたのに、とても信じられない。若い女の娘ならまだしも、これはいただけない。

■藤七温泉

続いて藤七(とうしち)温泉の「彩雲荘」に昼食と温泉入浴で立ち寄る。この付近は標高1500mクラスの山々が連なる八幡平の一角にあって、この温泉も標高1370mにある。おそらく東北地方で一番、日本でも屈指の高所の温泉だろう。

まずは昼食を食べる。岩魚の塩焼き、秋田の郷土料理のきりたんぼ鍋、田舎のおもてなしには欠かせないキノコや山菜の天ぷら、さらにゼンマイ、ヒメタケ、そして知らない山菜も出てきた。

その知らない山菜を仲居さんに聞いてみると「ミズの実だ」と教えてくれる。そして「ミズはウワバミソウと呼ばれる山菜で東北地方の北部のみに生息し、粘り気が特徴でクセがなく食べやすいよ」と親切に説明してくれたが、全てがズーザー弁、なまりのきつい東北弁なので何度も聞き直した。残念ながら私の文章表現力では東北弁を文字にすることはできなかった。

この温泉を一言で言えば、とにかくワイルドと言う言葉に尽きる。内湯もいい雰囲気だが、何と言っても露天風呂が素晴らしい。池のような湯船が5つくらいあり、10m四方くらい湯船の周りは平らな木材が置かれて湯の仕切りと通路を兼ねている。白濁しており底は全く見えないが、ポコポコと温泉が湧き出ている。

湯に浸かってみると、湯船の底にも木材が敷かれており、その間の泥の部分から適度に熱い湯が湧き出ているが、底の様子は見えない。泉質は硫黄泉で硫黄の臭いが漂っており、周りの景色は緑色の草木と温泉が出ている部分だけ茶褐色の岩肌が見えて、少し上を見ると雪渓も残っている。実にワイルドな温泉だ。

隣で湯に浸かっているおじさんと話をする。この湯船は毎年来る度に場所が少しずつ変わっているという。源泉の場所が年毎1~2mずれているというのだ。木材を置いただけの浴槽とはいえ移動にはそれなりに手間がかかるだろう。ひょっとしたら温泉に入りながら移動させているのかもしれない。



【藤七温泉の露天風呂 左奥が女性専用露天風呂】

この露天風呂は男女混浴で湯あみ着やバスタオルを巻いての入浴を許しているが、女性専用露天風呂もある。ただしそこに行くためには脱衣所で服を脱いで内湯を経由して混浴ゾーンを通らないといけない。女性専用露天風呂を女性の内湯の出口近くに作れば、そんなことをしなくていいに思っているのは私だけではないようで、隣のおじさんも同様なことを口にしてている。

しかし湯あみ着やバスタオルを巻いての入浴を許しているのだから、女性専用露天風呂は必要ないかもしれない。ただ濁ったこの湯にバスタオルを浸けると、そのバスタオルは他で使えないだろう。それにこの野趣満点の露天風呂はバスタオルなど巻いて入りたくないのかもしれない。かく言う私はバスタオルを巻いて入浴したことがないので、その辺の感覚はよく分からない。

■新玉川温泉

八幡平の西側の標高 740mの新玉川温泉にやって来る。本日はこの宿で泊まることになっている。私はこの宿は初めて訪れるが、立派なホテルで、あの有名な玉川温泉の姉妹館になる。その玉川温泉には昔一度立ち寄ったことがある。

玉川温泉は現代医療に見放された患者が最後の望みを賭けて温泉療養に訪れるという温泉で、源泉は超が付くほどの強酸性、さらにラジウム泉もあり放射線療養も期待でき、岩盤浴では寝て蒸気を吸い込むので吸引泉効果もある。

玉川温泉は昔ながらの湯治宿だが、それを現代風な宿として新しく作ったのが新玉川温泉で、建物も設備も豪華になっている。部屋に入ったらその広さや設備に驚くばかりで、リゾートホテルに来たような気分になる。この宿は湯治客がターゲットではなく、玉川温泉を知らない人たちにその源泉の魅力を伝えるために温泉リゾートを目指したのだろう。



【新玉川温泉の玄関と外観】

源泉は玉川温泉と同じ強酸性で、強酸性と言えば草津温泉が有名だが、草津温泉の水素イオン濃度 pH は 2.0 前後なのに、それよりも相当高い 1.18 は間違いなく日本一の強酸性の湯だ。

新玉川温泉館内にある岩盤浴に行く。岩盤浴は玉川温泉のように天然の温泉蒸気の噴き出し口の上に御座を敷いて寝るのを期待していたが、期待外れで都会にある入浴施設の岩盤浴と同じで石板を下から温めているだけだ。

それでも汗が大量に出て、その汗を流すために大浴場に行く。大浴場の真ん中には源泉 100% の大きな浴槽があり、これが pH1.18 の強酸性の湯になる。しかしいきなり 100% に浸かるのは危険なのか、弱酸性の湯や 50% に希釈した湯など様々な浴槽がその周囲にあり、一人用の蒸し風呂、打たせ湯、歩行浴、腰掛け湯といったバラエティに富んだ浴槽もある。

私は弱酸性の湯から順番どおり入浴して、最後に本丸の源泉 100% の強酸性の湯に入る。少し浸かっていると、「これは効く！これは凄い！」と思わず小声で叫びたくなるほどの刺激を感じ、久しぶりに興奮している自分に気が付く。

源泉 100% と 50% ではその効き方が雲泥の差で、100% の方は体中がヒリヒリと痛く、突き刺さるように感じる。ちょっとした怪我や虫刺され、水虫などには即効果がありそうだ。

50% に希釈しても pH は対数なので数値はそんなに変わらないはずで、pH1.18 が pH1.5 にもならないだろう。それなのにどうしてこう違うのか、不思議に思い近くにいたスタッフに「50% の希釈は源泉 50 に対して、真水 50 という意味ですよ」と訊ねると「そうです、50 対 50 です。だから pH はそんなに変わりません」と返ってくる。私は「それなのにどうして、100% の方はピリピリするのですか？」とさらに質問すると、スタッフは「100% の方は、湧き出たばかりなので鮮度が高く、刺激的なのです」と説明してくれる。温泉ソムリエの講習会で習った温泉の鮮度をこうまで感じるとは感動してしまう。



【大浴場の真ん中の源泉 100%の湯 周りに 50%の湯や各種浴槽がある 宿の HP より】

大浴場の入口には「世界の奇跡“癒”」と書かれた看板がある。この温泉は確かに奇跡だ。この言葉に私も思わず納得してしまう。

その奇跡の温泉は極めて強烈なので毒にも薬にもなる。従って入浴方法を間違えると大変なことになるから大浴場の近くには入浴相談室があって専門の医療従事者が常駐している。

「そこまでののか」と私は驚くばかりだ。これは本当に凄い。

■バイキング

新玉川温泉は夕食も朝食も食べ放題、いわゆる“バイキング”になっている。

今さら説明するまでもないが、バイキングは北欧の海賊のことで食べ放題の意味ではなかった。ところが日本で初めて自分で好きなだけ取って食べるというこの方式を採用したレストランの店名がバイキングだったので、食べ放題＝バイキングで広まってしまった。だから海外ではバイキングは全く通用しない。海外では食べ放題を意味する英語表記 *all you can eat* の看板はよく見かける。あるいはビュッフェという表現も使われるが、これはフランス語 *buffet* がもとで、食べ放題というよりもパーティ等で使われる立食という意味合いが強い。おっと、話がずれた。

私たちは指定された時間に食事会場に行ったが、会場入口の受付で結構な人数の人々が並んで待っている。その並んでいる列にそって低いパーテーションがあって、その向こう側には食事をするテーブルがいくつも置かれている。バイキング形式でもテーブルを指定してくれるところもあるが、この宿はそれも自由に選ぶようになっており、受付を済ませたお客たちが順番にテーブルを選んでいく。

しかし、そこで驚くべき光景を目にする。私の少し前で並んでいるおばさんがパーテーション越しに自分の荷物をテーブルに投げ込んだ。もちろんテーブルの確保をするためだが、これには私も含め、多くのお客が顔をしかめている。そんなこともおかまいなく、そのおばさんは平然として、一緒に来ている友人に「席取ったから」などと話している。

この行為には驚いた。しかしテーブルは奥の方までたくさんあって、全てのお客はテーブルを確保できた。それも窓際の良い所が確保できたから、荷物を投げ込んだおばさんたちは、パーテーション横の景色の悪いテーブルで食べることになった。

このような公共のモラルとかマナーとかは、何がいけなくて、どこまでなら許されるのかの線引きは難しい。そんな時、私が考える基準は、同じことを他の人も行った時にどうなるのかを想像してみることだ。

例えばゴミを拾う行為を考えてみる。誰かがゴミを拾う、それを他の人も真似して、皆が同様に拾った場合、世の中は綺麗になる。逆にゴミを捨てたら世の中はゴミだらけになってしまう。

ちなみにゴミがあっても拾わずに無視した場合は、現状維持で何も変化しないからマナーには反しないだろう。しかし何も行動を取らないということは、世の中は何も変わらないということの意味する。うん、実に奥が深い。

さて話を戻して、このおばさんの行為も皆が同じことをしたらどうなるのだろうと想像すれば、答えは直ぐに分かる。自分だけなので大勢に影響しないだろうと思わない方が良い。

ついでにマナーではないが、バイキングでの賢い取り方というものがある。

バイキングでは料理を山盛りに持って来る人が多い。持ってきたものは自分の責任なので無理して食べると健康に良くないが、残せば、フードロスが増える。つまり如何に適量を取ってくるかというのがポイントになる。

そのためには少しずつ何回も取りに行くことが好ましい。最初多くの人が料理を取りに行くので混雑して、周りの人が取るからつられて何でも取ってしまう。しかし少しすると混雑はなくなり、自分の食べたいものを選んで取ることができる。

私の場合は、最初取るのは1~2品で、主食は次の次くらいに取りに行くようにしている。都合4~5回は席を立っている。ただし時間がない時などはその限りではない。

■乳頭温泉郷の大釜温泉

田沢湖の北東にある標高 770m の乳頭温泉郷の「大釜温泉旅館」にやって来る。

乳頭温泉郷は有名な温泉郷で一応は秘湯だが、この宿は大型バスが駐車できるスペースがあるので観光バスの来訪が多い。本日も既に2台の大型バスが来ている。添乗員も「この宿は大型バスのツアー客慣れして説明も何もありませんので、下工具箱に靴を入れたら勝手に風呂に入って集合時間までに戻って来て下さい」と言っている。

男女別に内湯と露天風呂があって湯船はそれぞれ10人くらい入れる大きさだが、私たちのツアーが32人、先客もいるので入浴人数はキャパを超えている。それでも何とか入るのだから日本人の譲り合いの精神は何と素晴らしいことかと、妙なところで感心してしまう。

泉質は良い。私好みの強酸性で、やや緑色をして白濁している。硫黄泉特有の卵が腐ったような臭いの他に、理由は分からないが少し爽やかな感じもする。

乳頭温泉郷には 7 つの温泉が点在し、どの温泉も少しずつ泉質が異なる。この大釜温泉旅館の温泉は湧出温度 94℃、pH2.5、泉質は酸性含ヒ素ナトリウム・塩化物硫酸塩泉となっており、この“含ヒ素”というのが珍しい。

この宿は廃校になった小学校の校舎を移築したという。館内にはその説明看板がある。

1977 年に〇〇大学の学生 2 人が心中して建物が焼失し、再建は予算の関係で県内の小学校の校舎を移築したという。入口には「乳頭温泉小学校大釜分校」の看板が出ているが、商業目的の看板なので、そのような学校は今も昔も存在しないと書かれている。

建物の焼失は焼身自殺だったのだろう。〇〇大学と館内の看板にはテープが貼られて隠してあるが、外の看板は隠されておらず、秋田大学と書かれていた。

大学生の心中、それもこの地方ではエリート高校の出身者が集まる国立大学生の心中事件で焼身自殺とは、何とセンセーショナルなことか。

その事件のあった 1977 年は、私も大学生だったから、同じ年くらいだ。当時の私は旅行先では地方大学の学生食堂で食事を食べたり、学生寮に泊まったりしており、ひょっとしたらどこかで心中した 2 人に会っていたかもしれない。



【大釜温泉旅館の小学校の校舎を移築した建屋 左に「乳頭温泉小学校大釜分校」の看板】

■田沢湖で稲庭うどん

田沢湖にやってくる。田沢湖は日本一水深が深い湖で水深 423m もある。湖面は標高 249m なので、湖底は海面下 174m にあることになる。そのため田沢湖がどうやって出来たのかは未だに解明されていないという。水深が深いために湖水の温度が下がらず、真冬でも結氷しない。

田沢湖畔にある食堂で昼食になる。この店では稲庭うどんの製造・実演も行っており、昼食は稲庭うどんを中心に野菜の天ぷら、山菜の炊き込みご飯、秋田名物のいぶりがっこも出てきて、なかなかへビーな昼食だ。

もちろん稲庭うどんは美味かった。さすがは日本三大うどんと呼ばれるうどんの本場だ。さらに打ち立てなので一味違う。



【稲庭うどん中心の昼食】

稲庭うどんは独特の手延べ製法で作られる。江戸時代は殿様に献上された名品で製法は門外不出の秘伝とされ、一子相伝で味も秘密も守られ続けた。しかし 1972 年それを佐藤養助が公開して一般人に食されるようになり知名度が一気に向上した。公開しなければ商売を独占できたが、日本三大うどんにはならなかっただろう。同様なことは世間にはたくさんある。福岡の辛子明太子も同様で、「ふくや」の創業者が製法を公開して全国的に有名になった。

ちなみに佐藤養助とは歴代の当主が同じ名前を継ぐので、名前は何代も受け継がれている。

この店に着く前にバスの中で添乗員が「日本三大うどんは、稲庭うどん、讃岐うどんは皆さんご存知ですが、あとの1つは何うどんでしょうか？」とクイズを出していた。

群馬県出身の私は長い間群馬県の水沢うどんと思っていたが、一昨年五島列島で食べた五島うどんが実に美味かった。現地では盛んに五島うどんは三大うどんだと宣伝していた。

添乗員も答え合わせでは「3 つ目は諸説あって、水沢うどん、五島うどん、氷見うどん、きしめんなどです」とお茶を濁していた。それなら日本二大うどんでもいいのに、何故か三大にこだわるから不思議だ。これも同様なことが世間にはたくさんあるような気がする。

■国見温泉

国見温泉「森 山荘」は県道 266 号の突き当りにある温泉地で、標高約 850m だから景色がなかなか良い。近くには笹森山や秋田駒ヶ岳もあり、本日は日曜日なので山に登って下山してきた人が多く訪れている。ここは昔から登山者のための宿なのだろう。

まずは内湯に入る。お湯はやや白濁したエメラルドグリーン色をしている。添乗員の話では本来は透明なエメラルドグリーンだが、沈殿した湯の花が入浴する際に舞い上がって、白濁してしまうという。さらに先ほど入浴した大釜温泉の成分と、この国見温泉の成分が反応して黒く変色すると言っている。入浴して手足を見ると確かに黒く変色して、爪の付け根などが特に黒い。大釜温泉で使ったタオルはまるで雑巾のようになっている。大釜温泉の成分で気になっていた“ヒ素”が作用しているのかもしれない。



【黒く変色した手とタオル】

男女別の内風呂は4~5人でいっぱいになるほど小さいので2班に分けて入浴するが、露天風呂は混浴で1つしかない。これも6~7人でいっぱいになる大きさで、とてもじゃないが女性はこの混浴に入る勇気はないだろう。そこで宿の配慮で混浴をやめて時間制の男女別にしてくれた。従って混浴露天風呂への入浴時間が最もタイトで、約80分間の立ち寄り時間を4分割して約20分ずつ入るのだが、一般客もその中に加わることになる。本日は日曜日で登山客や観光客も多いから芋を洗うような入浴になる。

くじ引きの結果、私は後半組になる。そのため男女入れ替わりの前に露天風呂に入り、狭い湯船で湯に浸かっていると駆け込みで若者4人が入って来る。少しずつ詰めても全員入るには相当無理があり、何人かが湯から上がり場所をあける。その様子を見ていた若者たちは恐縮して、すぐに打ち解け世間話に花が咲く。狭い湯船だからこそ若者と会話が弾む、それも密な会話だ。湯船はむしろ狭い方がコミュニケーションに良いのではないかと感じる。

若者たちは地元の大学生で、専攻は工学部のシステム〇〇工学科と言っていたが、私が大学生の頃にはなかったような学科で覚えることもできなかった。



【国見温泉の混浴露天風呂 男女入れ替えのタイミングで撮影した】

■俺を年寄扱いするな

ツアー客の中にはいろんな人がいる。多くは年配のカップルの2人組だが、1人参加や、おばさん2人組、老夫婦に娘という3人組、珍しいおじさん3人組もいる。

食事の時に、このおじさん3人組が言い争いをしている。内容は「俺を年寄扱いするな、歳をとってもボケちゃいない」というもので、口の達者な1人が、もう1人をボケ老人扱いして何をするにも指図している。極端に言えば箸の上げ下げまで指図するから、それに反発して切れたらしい。普段おとなしい人ほど何かのきっかけではじける傾向があるというが、まさしくそれだ。

気まずい雰囲気はしばらく続いたが、何となく元に戻った。3人組なのでもう1人が上手く取り持ったようだ。

バスで私の隣の席に座った老夫婦がケンカを始めた。ケンカのきっかけはバスの出発時間に夫が遅れて戻ってきたからで、妻が夫のボケに言及して注意したらしい。それに対して夫は猛烈に反発して、「俺をボケ老人扱いするな、時間までに帰ってきたじゃないか」と大きな声で怒鳴っている。周りの乗客たちは驚いてはいるが、関わらないように見ぬふりをしている。

それでもこの夫婦も次の目的地に着くまでには何となく元に戻っているから面白い。

自分は歳なので人に頼らないと旅行できないと自覚している人はいいが、その境地にまで至っていない人が問題だ。老夫婦と娘という3人組のように娘に任せる場合は問題ないが、対等な関係の男3人組や、夫婦でも今まで主導権が夫にあった場合は、要注意かもしれない。

私も現在こんな仕事をしているので、彼らの光景を見ていて心配になる。

■つなぎ温泉

3泊目の宿泊地の“つなぎ温泉”にやって来る。かつては“繋温泉”と書かれていた。つまり“繋ぐ”に意味があった。八幡太郎と呼ばれた源義家が戦で傷を負った愛馬を温泉治癒させるために愛馬を繋いだことがこの名前の由来になっている。源義家は鎌倉幕府を開いた源頼朝の4代前なので、この話が本当ならば、つなぎ温泉は約1000年の歴史がある。

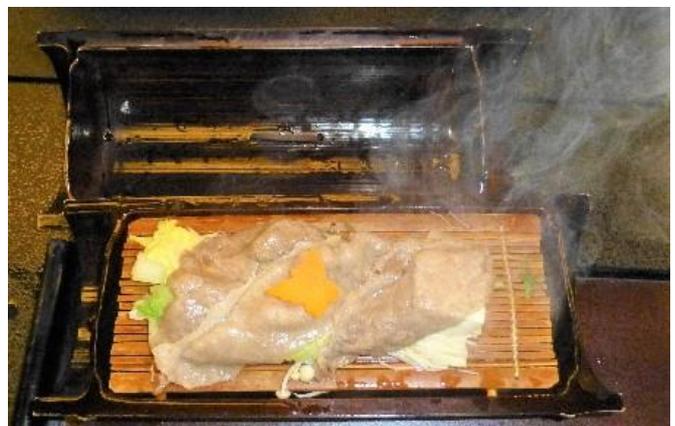
つなぎ温泉は盛岡の奥座敷と言われ、五所湖というダム湖の畔に大きなホテルが林立している。私たちが泊まる「ホテル紫苑」は5つ星の宿で、今回宿泊あるいは立ち寄り湯をした宿とは全く異なる豪華な宿なので、このツアーで巡る7つの秘湯には入れていない。

秘湯でない豪華な宿をあえて最後にしたのは偶然ではないだろう。豪華な宿に対比して秘湯がより鮮明に思い出に残り、豪華な宿もより豪華に感じるという相乗効果が期待できるからだ。

私はこのようなツアーを企画する担当者に興味を持ち、添乗員に聞くと「企画は社内の若い人、数人が担当しており、そのためトイレ休憩の間隔が長いのと大型バスの通行が困難な道を行かされることが多いです」と言っている。結局現場でフォローしていると言いたいようだ。

夕食は豪華極まりない、今までの秘湯の宿では味わえないものがたくさん出てくる。刺身や鰻のチラシ寿司など数えると12品もある。

中でも珍しいのは「県産黒毛和牛の竹筒蒸し」で、竹筒を模した鍋の底に仲居さんが水を入れると、蒸気が出てきて蒸し始める。これは面白い試みで、見せる料理というものだろう。



【黒毛和牛の竹筒蒸し 蓋をとった様子】

駅弁などでは既に商品化されており、その原理は、生石灰 CaO に水 H_2O を加えると消石灰 Ca(OH)_2 ができ、その時発生する熱で温めるというものだが、私はこれを旅館で初めて見る。

館内では地元名物の「盛岡さんさ踊り」が毎晩催されている。一足早い東北の夏祭りを体験しようと、夕食後私たち夫婦も見に行く。

会場のロビーには既に宿泊客が 100 人くらい集まっており、地元の保存会による熱演が始まる。太鼓と笛と鐘というシンプルな演奏に踊りが加わる。私はテレビでは見たことはあったが生では初めて見ることになり、やはり迫力が違う。



【ロビーで開催された“盛岡さんさ踊り”のステージ】

このような夏祭りの疑似体験ができるのはありがたいことだが、それが逆に心配になる。と言うのは私が見てきた衰退した温泉地に似ているからだ。

観光地の巨大ホテルは、収益を上げるためにホテル内に飲食店や売店、アミューズメントなど全てを用意する。そのために宿泊客はホテルから出なくなる。そうすると温泉街に人が行かなくなり、温泉街はじめ温泉地全体に活気がなくなる。その結果、温泉街だけでなく巨大ホテルにもお客が行かなくなる。これが最近多く見かけるさびれた温泉地の姿である。要は温泉地全体で盛り上げないと繁栄は続かないことを意味している。

私は、願わくはこのつなぎ温泉がそのようにならないことを祈って会場を後にする。

■須川温泉

須川温泉は秋田県と岩手県の県境にあり、近くには標高 1626m の栗駒山がある。その昔に私は岩手県側の須川高原温泉という宿に来たことがあるが、本日は秋田県側の「栗駒山荘」に立ち寄り湯をする。この宿の露天風呂は標高 1126m、つまり“いいふろ”という高さにあると添乗員がバスの中で教えてくれた。

比較的新しい宿で、風呂も綺麗で大きな木材でできている。露天風呂からの景色が良いという話を聞いていたが、私たちが着いたころには霧がはじめており、景色は期待できそうもない。

大浴場に行き露天風呂に出てみる。晴れていれば東北地方で2番目に高い標高 2236m の鳥海山を見ることができるというが、残念ながら霧で何も見えない。露天風呂の木製の浴槽は入浴しながら景色を見るために意識して横に長く造られている。

ツアー客の誰かが「この向こうの雄大な景色を見ているつもり」と声を出している。

私は、標高 1126m の“いいふろ”の空気を硫黄の臭いと共に思いっきり吸い込み、そして景色は次回にとっておこうと最後の秘湯を後にする。



【晴れていれば須川温泉「栗駒山荘」の露天風呂からの眺望 宿のHPより】

尚、景色も見えず写真撮影も禁止なので、写真は撮らなかったが、宿のHPにあった露天風呂の写真に掲載させてもらう。

■秘湯巡りを終えて

秘湯巡りを終えて帰り新幹線の中、私は硫黄の臭いの付いたタオルで顔を拭きながらつらつら考えた。

旅は従来の観光型からこれからは体験型に変わろうとしていると、私は10年以上前から主張している。温泉は明らかに体験型の旅のひとつだ。

ただ以前から温泉に入る旅はいくらでもあった。それは観光をしてから宿で温泉に浸かるというもので観光に温泉が付随している場合が多い。そもそも日本人にとって入浴することは日常で、家庭でも入浴剤を入れれば温泉気分になり、スーパー銭湯の広まりは温泉を身近に感じさせて、もはや温泉は日常化している。

しかし今回巡った秘湯は違う。現代の日本人、それも都会に住む人々にとって秘湯は日常ではない。普段体験できない不便な生活、強烈な泉質、自然と一体となった風呂、絶景、虫の鳴き声、郷土料理やシンプルは食事、非日常のオンパレードになっている。

秘湯に特化した旅は個人旅行ならばとにかく、ツアーではかなり珍しい。ましてや今回のツアーは阪急交通社の高級ブランドのクリスタルハートで、同じ阪急交通社の庶民的なブランドのトラピックスではない。

このような高級路線の旅に秘湯を持ってくるのはかなり難しい。それゆえ大型バスがギリギリ行ける場所が選ばれるが、夏油温泉だけは宿のマイクロバスの送迎なので初日に組まれた。それでも部屋にはトイレや洗面所もなく共同だった。さらに宿や風呂が小さいので 32 人が入浴できるように時間分割するなど苦勞の跡も見えた。

ツアー客の反応も上々で、これからはこの類の旅は増えるだろうと容易に想像できる。そうすると不便な秘湯は便利になり、秘湯が日常化していく。やがて秘湯の旅は単なる温泉旅になってしまうのは世の常で、時間の問題だろう。

だとすると、秘湯が秘湯のうちに訪問することだ。つまり今回行った秘湯、あるいは行っていない別の秘湯も早く行った方が良いという結論になる。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。

評価の基準は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

宿泊した宿は通常通りに評価し、ツアーで一括入金のため私が直接料金を払っていないためコスパについては宿の HP で宿泊費を調べて評価した。立ち寄り湯は泉質、風呂、建物・部屋、立地環境のみを評価し、総合点は算出していない。

夏油温泉「元湯夏油」は泉質 4、風呂 5、料理 3、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 3.5、立地環境 5、総合点 4.07 になった。

湧出温度 50~68℃、pH6.0~7.2、泉質はナトリウム・カルシウム-塩化物泉（低張性高温泉）になっている。

松川温泉「松川荘」は泉質 4、風呂 4、建物・部屋 4、立地環境 4 で、湧出温度 87℃、pH4.3、泉質は硫黄泉になっている。

藤七温泉「彩雲荘」は泉質 4、風呂 5、建物・部屋 3、立地環境 5 で、湧出温度 91℃、pH3.7、泉質は硫黄泉になっている。

新玉川温泉は泉質 5、風呂 5、料理 3、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 3.5、立地環境 5、総合点 4.07 になった。

湧出温度 98℃、pH1.18、泉質は強酸性泉になっている。

乳頭温泉郷「大釜温泉」は泉質 4、風呂 4、建物・部屋 4、立地環境 4 で、湧出温度 94℃、pH2.5、泉質は酸性含ヒ素ナトリウム・塩化物硫酸塩泉になっている。

国見温泉「森 山荘」は泉質 5、風呂 4、建物・部屋 3、立地環境 5 で、湧出温度 94℃、pH2.5、泉質は酸性含ヒ素ナトリウム・塩化物硫酸塩泉になっている。

つなぎ温泉「ホテル紫苑」は泉質 3、風呂 4、料理 5、コスパ 3、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 3.85 になった。

湧出温度 51.9℃、pH8.7、泉質はアルカリ性単純泉になっている。

須川温泉「栗駒山荘」は泉質 4、風呂 4、建物・部屋 4、立地環境 5 で、湧出温度 50℃、pH は 2.3、泉質は強酸性明礬緑礬泉になっている。

■旅の記録

旅行は 2022 年 7 月 8 日（金）～7 月 11 日（月）の 3 泊 4 日で実施、行程を以下に記す。

- ・ 1 日目 8 時 10 分に東京駅集合、8 時 48 分東北新幹線に乗り、北上駅で下車
夏油温泉「元湯夏油」の送迎マイクロバスに乗って 13 時宿にチェックイン、
夏油温泉での入浴回数 7 回
- ・ 2 日目 9 時に宿を出発し、松川温泉「松川荘」に立ち寄り湯、入浴回数 2 回
藤七温泉「彩雲荘」で昼食と立ち寄り湯、入浴回数 1 回
新玉川温泉にチェックイン、入浴回数 7 回
- ・ 3 日目 9 時 30 分宿を出発し、乳頭温泉郷「大釜温泉」立ち寄り湯、入浴回数 1 回
田沢湖湖畔の「田沢湖共栄パレス」で昼食
国見温泉「森 山荘」に立ち寄り湯、入浴回数 2 回
15 時つなぎ温泉「ホテル紫苑」チェックイン、入浴回数 7 回
- ・ 4 日目 8 時 30 分に宿を出発し、須川温泉「栗駒山荘」に立ち寄り湯、入浴回数 1 回
平泉の「ホテル弁慶」で昼食、酒蔵「せきのいち」で試飲や買い物
一関駅 15 時 51 分発、東北新幹線で東京駅 18 時 24 分に到着

4 日間の入浴回数の合計は 28 回になった。尚、入浴回数は脱衣場で服や浴衣を脱いで入浴することを 1 回として、着替えずに内湯から露天風呂に裸で移動することは回数にいられていない。

費用は夫婦 2 人で約 23 万円、1 人当りでは約 11 万 4 千円、内訳を以下に示す。

- ・ 阪急交通社への払い込み 110000 円／人
- ・ 自宅から東京駅までの往復 約 1000 円／人
- ・ 初日の昼食、飲み物、土産など 約 6000 円（夫婦で）